

青丘文庫 月報

No.145

2000年1月1日

図書室 〒650-0017 神戸市中央区楠町 7-2-1 神戸市立中央図書館内

Tel 078-371-3351 相談専用Tel 078-341-6737

編集人 〒657-0064 神戸市灘区山田町 3-1-1 (財)神戸学生青年センター内

飛田 雄一 Tel 078-851-2760 FAX 078-821-5878

郵便振替 00970-0-68837 青丘文庫月報 年間購読料 3000 円

ホームページ <http://www.hyogo-iic.ne.jp/~rokko/sb.html>

巻頭エッセイ

これまで、そして、これから



伊地知紀子

巷では、「2000 年問題」という言葉をよく聞く。ふっと、済州島の村で、陰暦で過ごしていた日々を思い出す。気がつけば、日本の年末は過ぎていたこと。陽暦が主流である世界の流れのなかに身を置けば、「ミレニアム」を前に私たちは待機し、目の焦点を未来へとまっすぐ絞るように要請されているようにも感じる。

今年の7月、電話がかかってきた。「のりこか、俺や、オッパやで」。生野からかかってきた電話の主は、私が済州島に住みはじめた時、最初にいろいろ世話をしてくれたRさんだった。済州島からかかってきた電話には、いつも、日本に来て仕事はないよといていた。Rさんからの電話の1週間後、「のりこ、オンニや、来た」と妻のJさんからかかってきた。7年ぶりの再渡日。「私ら要領はわかってる。韓国にいても仕事がないんやから、日本にいても同しやろ」と、久しぶりの再会のなかでJさんは言った。

7年前、日本で稼いだ金で、広い畑を買い農産物の仲介業を営んだものの、Rさんの博打好きに広げ過ぎた事業の行き詰まりに不景気、その借金を返すべく再び日本へ来た二人。ヒジュはどうしているのだろう。幼稚園に馴染めず、軽食堂をしていたオンマの横をうろちよろしながら、いつのまにか5歳でアッパのコンピューターをいじれるようになった末息子。あんまり熱中しすぎて円形脱毛症になっていた。上の二人の子どもと一緒に、村のおばあちゃんの家で預けてきたとJさんはというが。「あの人らにはあの人の仕事があるから」と、日本に永住する同じ村出身の人には世話にならず、同じ境遇の人同士で連絡を取り合う。あと5年いて、借金を返してから済州島に戻るのだという。

秋夕の後、済州島の村のアボジとオモニ（私がそう呼んでいる）に電話をした。元気そうな声に、ほっとした。長男夫婦もがんばってるという。長男のSさんは、10年前に渡日した経験がある。大阪に住む叔父のプレス工場で働いた。過密な労働と会話のない仕事場に参ってしまったSさんは、3ヶ月で済州島に戻った。叔父は、済州島で数少なかった脱穀工場を持っていたSさんの祖父である彼の伯父のように、工場を持つ夢を日本で実現したのだった。Sさんの祖父は、4・3抗争のなかで殺された。叔父は、工場を継ぎそうにない自分の子どもの代わりに、Sさんに工場を継がせようとしていたが、かなわなかった。済州島に戻ったSさんは、放し飼いで鶏を育てるとい昔のやり方で養鶏場を始めた。飼料よりもそこの草葉を食べ走り回った鶏の肉は、それだけで甘味と歯ごたえがあり、この上なくおいしかった。鶏は、観光客相手の参鶏湯専門の食堂に卸すのだが、食堂の在庫がわずかになってから来る注文数を配達するという契約だ。それでは、収入を算段するまでいかない。Sさんは、養鶏する数を減らしたり、畑で今

まで済州島では作られていない作物を試みたりと、試行錯誤の日々である。

Rさん、Jさん、そしてSさんも40歳前後だ。今世紀、日本の植民地化のなかで、生きる道を求めて済州島から多くの人間が渡日し、ある人は在日し、ある人は往来し、ある人は済州島に戻った。そうして今、この3人のように、いかに生きるかという選択の幅が広がっているかのようだ。けれども、その選択には、さまざまな条件がついている。そのことに、今世紀の初めと終わりでは、どのような違いがあるのだろうか。

「畑で働いてる姿は見えても、何を考えながら仕事してるかは、わからんだろう」と村でいわれたことを思い出す。これまで、何ができて、何ができなくて、何ができたのか、それが自分たちの暮らしにとってどういうことなのか、そんな話を山のようにしたように思う。これまでとこれからは、まっすぐ結びつかない。語り切れない、語り尽くせないこれまでのなかで、人々の選択がある。

第182回 朝鮮民族運動史研究会（11月14日）



「戦後日本における植民地朝鮮の記憶」 Kristine Dennehy（クリスティン・デネヒー）

私はカリフォルニア大学ロサンゼルス校の大学院生ですが、現在は京都大学人文科学研究所に在籍し、日本に滞在する十四ヶ月の間に博士論文のために調査を行なっています。研究テーマは「戦後日本における植民地朝鮮の記憶」です。私の研究には、一九五〇年代以降の朝鮮史研究会など「研究会」の形成史や、植民地時代に関する書物や論評を書いた学者（日本人と在日韓国朝鮮人も含めて）の活動も含まれますが、特に、植民地期の学者が日本の植民地支配を正当化するために行なった研究に対する、戦後の批判的な視点に興味があります。

先ずこの研究テーマと関連して最近アメリカで出された日本研究書のうち四冊を紹介します。

1. Dower, John. *Embracing Defeat: Japan in the Wake of World War II*. New York: W.W. Norton & Company, 1999.
2. Gordon, Andrew, ed. *Postwar Japan as History*. Berkeley: University of California Press, 1993.
3. Koschmann, Victor J. *Revolution and Subjectivity in Postwar Japan*. Chicago: University of Chicago Press, 1996.
4. Yoneyama, Lisa. *Hiroshima Traces: Time, Space, and the Dialectics of Memory*. Berkeley: University of California Press, 1999.

次に、「記憶」（collective memory）という概念に関しては、以下の三冊が参考になります。

1. “What remains of the past in the lived reality of groups, or what these groups make of the past” (Pierre Nora, *La Nouvelle Histoire*)
— 戦後日本社会の中のグループ：在日韓国朝鮮人、歴史家、学者、知識人
2. “The study of the manipulation by collective memory of a historical phenomenon” (Jacque LeGoff, *History and Memory*)
— 歴史現象の巧みな取り扱い
— マスコミが作っている現代史、複数の記憶
3. “Social memory identifies a group [now], giving it a sense of its past and defining its aspirations for the future” (James Fentress and Chris Wickham, *Social Memory*)
— 過去、現在、将来の関係

戦後朝鮮史研究の中では、次の研究者の論文などが中心になります：旗田巍、山辺健太郎、朴慶植、姜徳相、姜在彦、宮田節子、中塚明、梶村秀樹。資料としては、次のような学術雑誌が参考になります。：歴史学研究、歴史評論、日本歴史、思想、コリア評論、朝鮮学報、朝鮮史研究会論文集、朝鮮研究年報、朝鮮問題研究、朝鮮学術通報、社会科学研究、思想の科学。新聞と総合雑誌の方は中央公論、文芸春秋、世界等です。

一つの例として、占領直後の中央公論 v.67 n.9 (1952年9月)、pp. 68-86. 「在日朝鮮人の生活と意見」という記事があげられます。ここでは、
1. 朝鮮籍者の場合、2. 韓国籍者の場合、3. 日本人の反省、という3つの部分に分けて在日朝鮮人のことを取り扱いました。

戦後になって戦前の東洋史、歴史学と朝鮮総督府の諸問題(植民地支配や抑圧の正当化、歴史の歪曲や神話)の見直しが行なわれました。例えば、以下の四つの点についてです。

1. 停滞論 2. 日鮮同祖論 3. 満鮮一体論 4. 他律性史観

以上の諸問題に対して、戦後の新しい歴史認識の特徴は次の通りです。1. “科学的、正しい歴史観、2. 事実・実証的、3. 朝鮮人民の対抗、4. 民族解放闘争、5. 朝鮮民族社会の歴史的発展”。

最後にこの新しい歴史認識については次の五つの例があります。

1. 旗田巍「朝鮮史」(1951): “半島社会の発展の面から動的にその歴史をつかみ…” (史学雑誌の「回顧と展望」から)

2. 歴史学研究(1953年7月特集) “朝鮮史の諸問題”

p. 87 “現在日本において朝鮮戦争をきっかけとし朝鮮に対する関心が一段と高まり、正しい朝鮮歴史を知りたいという日本国民の要望が非常に多い、私たちはこれらの要望に答えて科学的な正しい朝鮮歴史の研究を深めていきたいと思う。日本の過去におけるような国家権力の擁護の下にその政策の一環としての歴史研究ではなくて如何なる偏見をもさしはさまず、共に相携えて将来の平和国家建設のための礎の一つをきづいていきたい。現在尚も総督政治・寺内・斎藤等の武断政治・同化政治の謳歌し、土地調査事業は民衆を救う朝鮮社会制度の大革新であるとするような論があるが(藤田亮策著「朝鮮の歴史」)これはまさに朝鮮人民を侮辱するにも余りあることである。私たちは従来における朝鮮歴史の研究業績に更に再検討を加え正しい朝鮮歴史の解明に力をつくしたいと思う。特に従来等閑視された近代及び現代日本帝国主義の植民地支配・朝鮮人民の抵抗・民族解放運動の歴史—に重点をおきたいと思う。” (朝鮮歴史研究会)

3. 旗田巍、「朝鮮史における外圧と抵抗」

“外圧からの解放が、単なる外圧からの脱出でなく、同時に朝鮮内部における解放と結びついた時に朝鮮の発展があった…” (史学雑誌)

4. 山辺健太郎、「三・一運動の現代的意義」思想 n. 372、373 (1955年6、7月)

“現代の朝鮮民主主義人民共和国の成立も、そのみなもとをたずねると、三・一運動にはじまる民族解放運動のなかにあるし、また、李承晩政権の性格も三・一運動以来の朝鮮民族解放運動史、ことにそのなかでおこった古い民族運動指導者の裏切りの歴史をふりかえてみて、はじめてはっきりわかる。”

天道教について: “…パリの講和会議やウィルソン大統領に請願し、これらの外国の力をかりて、朝鮮の独立をはかろうとした。いわば純粹の他力本願で、大衆運動にもとづく、朝鮮人民の力で、独立運動をたたかいとる気は全然なかったのである。”

5. 山辺健太郎、「三・一運動について」歴史学研究 n. 184、185 (1955年6、7月)

“三・一運動のもとになった朝鮮独立運動は…世界的な原因がある…本質的世界革命の一部分となっている”

“…運動のはじまりは、シベリア、中国、アメリカ、日本にいた朝鮮人亡命者や学生からおこっている…これが朝鮮に集中してあの大運動になったのである。”

シベリア: ロシア革命の影響で朝鮮人(おもに農業移民)も解放されて、反革命軍や日本帝国主義の干涉軍とたたかった。また、階級意識が高かった。

日本: “東京にいた朝鮮人学生をやった独立運動は、思想からいってもひじょうにしっかりしたもので、宣言の文章のうえにも、ロシア革命の影響がはっきりあらわれている。”



第219回 在日朝鮮人運動史研究会関西部会（11月14日）**神戸港における戦時下強制連行 飛田雄一**

すでに名簿が明らかとなっている戦時下神戸港における朝鮮人・中国人強制連行について報告をした。詳細は、『むくげ通信』177号（1999年11月）所収拙稿「『戦時下神戸港における朝鮮人・中国人強制連行』覚え書き」参照のこと。

以下のむくげの会のホームページでも見ることができます。

<http://www.hyogo-iic.ne.jp/~rokko/mukuge/177/hida.html>

●青丘文庫研究会のご案内●**第221回 在日朝鮮人運動史研究会会**

2000年1月16日（日）午後3時～5時

報告者 金 慶海

テーマ

「戦時下神戸川崎重工への朝鮮人強制連行について」

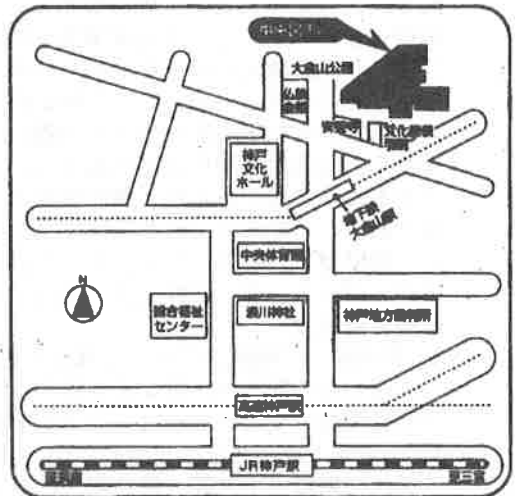
第184回 朝鮮民族運動史研究会

1月16日（日）午後1時～3時

報告者 金 英達

テーマ

「韓国法における『国民』と『同胞』の概念—在外コリアンの国家への包摂と排除—」



※会場はいずれも青丘文庫（神戸市立中央図書館内、地図参照）

編集後記

- ★ 新年あけましておめでとうございます。2000年をどのように迎えられましたか。
- ★ 昨年12月25～26日、舞鶴に朝鮮人強制連行の調査に行ってきました。研究会からは、水野直樹、堀内稔、金慶海、クリスティン・デネヒー、飛田らが参加しました。メンバーは22名で、岐阜、名古屋、京都、舞鶴、高槻、兵庫、広島から参加者がいました。調査もしましたが、もういや！というぐらいカニも食べました。でもまたカニの顔をみたくなってきました。
- ★ 2000年度（4～3月）の月報購読料（3000円）送金のために郵便振替を同封しています。送金をよろしくお願いします。
- ★ 青丘文庫、二つの研究会および月報を本年もよろしくお願いします。

（飛田雄一 rokko@po.hyogo-iic.ne.jp）